

〔論 文〕

小中学生の仲間との関係調整における交代性意識の発達 －遊びの好み・互惠性意識との関連－

The Development of Turn-Taking Consciousness in the Regulation of Peer
Relationship in Elementary and Junior High School Students
:Relationship with Play Preferences and Reciprocity Awareness

藤 田 文
Fujita Aya

Abstract

The purpose of this study was to investigate the development of turn-taking consciousness in the regulation of peer relationship and to investigate the relationship between the consciousness and play preferences and reciprocity consciousness. A questionnaire survey of 663 elementary and junior high school students was conducted using Google foam. The questions were: the turn-taking consciousness scale, the play preference and the reciprocity. The results showed that turn-taking consciousness did not change among fourth-, sixth-, and eighth-graders. The results also indicated that there is a relationship between the turn-taking consciousness and the preference for rule play and the reciprocity consciousness. And it is suggested that the importance of rule play experiences for the development of the regulation of peer relationship.

Keywords: peer relationship, turn-taking consciousness, elementary school children, junior high school children, play

【問題と目的】

仲間との関係調整はどのように発達し、その発達を促進するにはどのような体験や特性が必要だろうか。同世代の仲間との関係調整能力は子どもの社会性の発達にとって重要である。幼児期にこの発達がうまくいかないと、青年期の不適応のリスクになることが示されている(Asendorpf,et.al,2008)。近年、いじめの認知件数が61万件、不登校児童生徒が約30万人と増加傾向にある。この中には、仲間との関係調整能力の未熟さが背景となるケースもあると考えられる。従って社会性の発達促進のために、児童期から大学生までを通した仲間との関係調整の発達とそれに関わる要因を明らかにする必要がある。

従来の研究で、幼児期から児童期の仲間との関係調整には、交代性ルールの産出が重要であることが示されている(阿南,1989;藤田,2007,2015,2016,2018)。これらの研究では、ピー玉遊びや魚釣りゲームなどの遊び場面において、4歳から9歳までに交代性ルールの基準が明確になり、言語的に明確な交代性ルールを産出して共有できるようになるという発達が

明らかになっている。遊具の使用などに関して基準が明確な交代性ルールがあると、いざこざも生じにくくなる。つまり、交代性ルールの産出と基準の明確化、また他者を配慮したルールの主導が、仲間との関係を調整する足場かけの機能を持っていることが示されている。また、大学生の協同学習場面の研究(藤田,2019)でも、交代性に関する意識が高い学生は低い学生に比べて、協同学習における自分の貢献度を高く評価し、協同学習に満足していることが示された。これらの研究から、仲間との関係調整を行うためには、他者との平等性を確保するための交代性を意識し、交代性ルールを産出することが重要だと考えられる。

しかし、児童期後期から中学生にいたる交代性ルールやその意識を中心とした仲間との関係調整については検討が不足している。そこで本研究では、児童期から中学生を対象にして、交代性意識の発達過程とその発達に関連する要因を明らかにしていく。

本研究では、交代性意識を「仲間同士の遊びや話し合いの中で、遊具や物の使用、行為や役割の機会に関する平等な交代のための明示または暗黙のルールを重視する意識」と定義する。子ども同士の遊びの中では遊具の取り合いによるいざこざが多くみられる。また、一人の子どもだけが長時間遊びを実行しており、もう一人子どもは待たされている状況も観察される。従って、遊具の使用や遊びを実行する機会を確保することが平等な関係調整には必要である。さらに、遊具を並べたり配布したりする役割や当番などのやりたくない役割についても、平等性を確保することが重要である。従来これらの意識を測定する尺度はないため、本研究では小中学生の日常生活を考慮して、遊びや話し合い場面での交代性意識に関する質問項目を設定した。

仲間同士の遊びや話し合いの中で、役割行動や物の使用に関する平等な交代のためのルールを重視する交代性意識は、加齢とともに高まるのではないかと予想される。また、従来の研究で女兒の方が他者を配慮した交代性ルールの産出が早期に多くみられることが示されている(藤田,2007,2015)。従って、児童期以降の交代性意識に関しても女兒の方が高いのではないかと予想される。

以上のことから、本研究で設定した交代性意識の尺度を使って、小学4年生から中学生を対象に、交代性意識の年齢差と性差を検討することを第一の目的とする。

次に、交代性意識の発達に関わる要因を検討する。交代性意識に関わる第一の要因として、子ども時代の遊びの好みとの関連を取り上げる。近年の仲間関係の研究では、情動的な機能が注目されている。岩田(2019)では、遊び場面における「おもしろい」「楽しい」という感情の言及が興味や関心の共有、仲間を求める機能、過去の経験の共有の機能を持ち、自他の関係調整や仲間関係の親密度を高めるために重要な役割を果たしていることが示された。同様に芝崎・芝崎・徳田(2016)でも、幼児の仲間関係における感情表出は、他児とのつながりを求める機能を持ち、仲間関係を広げることが示された。さらに、藤田(2022)では、大学生を対象とした研究で、子ども時代にごっこ遊びを好んだ人は共感性が高く、交代性意識が高い傾向が示された。つまり、子ども時代の楽しさを伴う遊び経験が仲間との関係調整や交代性意識と関連している可能性が示唆されている。

従って、本研究では、小学生には現在の遊びの好み、中学生には子どもの頃の遊びの好みを探ることで、遊びの好み交代性意識と関連しているのかを検討する。遊びの種類は、藤田(2022)で影響があると考えられたごっこ遊び・規則遊び・一人遊びに分類し検

討する。藤田(2022)では、規則遊びの方がごっこ遊びに比べて明確なルールに従うために交代性意識と関連していると予想されたが、むしろごっこ遊びの方が交代性意識と関係するという傾向が示された。明確なルールがすでに決められている規則遊びよりも、子ども自身が想像的に物の使用や役割を決定するごっこ遊びの方が交代性意識に関連している可能性が示唆された。一方で、ゲームなどのルールが明確なアクティビティが社会情動的コンピテンスの発達を促進することが示されている (Hawkins,R.,&Nabors,L.,2018; Gruweski,K.,2020)。このことから、規則遊びの好みと交代性意識の関連は再検討される必要がある。本研究では、遊びの経験が進行形に近い小中学生で、遊びの好みと交代性意識の関連を再検討していく。

交代性意識に関わる第二の要因として、互惠性意識を取り上げる。広辞苑によれば、互惠とは利益や便宜を与え合うことを指す。瀧川(2009)によれば、互惠性とは、ある社会的関係性の中でお互いが他者の行為に対して何らかの形で報いることをいう。その意味で互惠性は他者の行動に条件づけられた社会的行為である。言い換えると、互惠性の意識とは、好意を与えてくれた他者に対して同様のお返しをしなければならないという感情である。この互惠性意識を測定するために、谷口・田中(2005)は、相手に与えた利益よりも少ない利益を自分が得ていることに対してどの程度関心があるかという利得不足志向性と相手に与えた利益よりも多い利益を自分が得ていることに対してどの程度関心があるかという利得過剰志向性の2側面の尺度を作成した。

谷口・田中(2005)では、小学生の男子が中学生の男子よりも利得過剰志向性が高く、女子が男子よりも利得過剰志向性が高いことが示された。このようなお返ししなければ申し訳ないという感情を伴う互惠性意識は、平等性という客観的認識を伴う交代性意識と類似しており、強い関連が見られると予想される。谷口・田中(2003)では、高校生の長期的な友人関係において、サポートの互惠性が精神的健康と関連していることが示されている。互惠性意識と交代性意識に関連が見られれば、交代性意識も精神的健康と関連する可能性が示される。

以上のことから、交代性意識に関わる要因として、子ども時代の遊びの好みと互惠性意識との関連を検討することを第二の目的とする。

【方 法】

研究参加者

研究参加者は、小学4年生男児110名、女児111名、小学6年生男児110名、女児110名、中学2年生男子112名、女子110名の計663名だった。

手続き

マクロミル社に依頼し、同社保有サンプルを対象としたwebサンプリング形式による質問調査を行った。研究参加者は小中学生だったため、保護者の同席のもとで回答してもらった。小学生と中学生で質問項目は同様だったが、小学生の調査項目はひらがなでの表現を多用した。質問内容は以下の通りだった。

(1) 交代性意識：小中学生の日常の友人関係で遭遇する交代性ルールが必要とされる場面を想定して、質問項目を設定した。「トランプでカードを配る役割は交代でやった方がいいと思う」「ごみすて当番は、やりたくない人が多いので、交代するルールを決めた

方がいいと思う」など交代性意識に関する8項目について、どのくらいそう思うかについてあてはまる程度を「1:まったく思わない」、「2:あまり思わない」、「3:少し思う」、「4:とても思う」の4段階で評定してもらった。

(2) 遊びの好み: 遊びの好みを調べるために、ごっこ遊びを4個(おままごと、アニメやヒーローごっこ、学校の先生ごっこ、お店屋さんごっこ)、規則遊びを4個(おにごっこ、かくれんぼ、ケイドロ、ドッジボール)、一人遊びを4個(お絵描き、積み木、粘土遊び、折り紙)の12個の遊びを設定した。小学生には「次の遊びはどれくらい好きですか」、中学生には「子どもの頃に、次の遊びはどれくらい好きでしたか」と質問し、それぞれの遊びをどのくらい好きかの程度を「1:まったく好きでない」「2:あまり好きでない」、「3:どちらともいえない」「4:少し好き」、「5:とても好き」の5段階で評定してもらった。

(3) 互惠性意識: 互惠性意識については、谷口・田中(2005)の利得過剰志向性尺度を採用した(Table1参照)。利得過剰志向性は、相手に与えた利益よりも多い利益を自分が得ているということに対して、関心があるかを表すものである。谷口・田中(2005)では、小・中・高校生が回答するのに適切な項目を作成しているため、この尺度を採用した。

「友だちが私に対して良いことを言ったり、してくれたりした時は、感謝の気持ちを表

Table 1

互惠性・利得過剰志向性尺度(谷口・田中,2005)

-
1. 友だちが私に対して良いことを言ったり、してくれたりしたときは、感謝の気持ちを表したい
 2. 友だちにしてあげることより、友だちがしてくれることの方が多いときは、申し訳ないと思う
 3. 私は、友だちが何かしてくれたとき、そのことを忘れることはない
 4. 友だちが私にしてくれたことを、私ができないときは、何か別の方法で友だちにお返しをしたと思う
 5. 何か目標を達成したとき(例えば、良い成績を取ったり、試合に勝ったりしたとき)、友だちがそれをほめてくれたら、私も友だちに対して同じようにしたい
 6. クリスマスや誕生日に友だちとプレゼントを交換するとき、相手がくれたプレゼントの方が値段が高い場合には、申し訳ないきもちになる
 7. 私が困っているときに友だちが助けてくれた場合、私は友だちに対して同じことをすべきだと思う
 8. 友だちと待ち合わせをしていて、私が約束の時間に遅れたときは、申し訳なく思う
 9. 友だちの家の食事に招待されたときは、何か飲み物やデザートを持っていこうと思う
 10. 友だちが私を遊びに誘ってくれたら、今度は私も同じように友だちを遊びに誘いたい
 11. 友だちが私にプライベートなこと(例えば、自分だけの秘密など)を話してくれたときは、私も同じように友だちに何かを話したい
 12. 友だちにプレゼントを買うようなときは、これまでに友だちが私にくれたものを思い出して、それより安いものは買わないようにする
 13. 友だちが週に3回私を遊びに誘ってくれることがあれば、私も同じように週に3回友だちを遊びに誘ってあげたい。
-

したい」「友だちにしてあげることより、友だちがしてくれることの方が多いときは、もうしわけないと思う」など13項目について、一番仲良しの友だちとの関係でどのくらいそう思うかを「1：まったく思わない」、「2：あまり思わない」、「3：少し思う」、「4：とても思う」の4段階で評定してもらった。

倫理的配慮

調査はWEB上で実施されたが、本研究への協力に同意したものを調査対象者とした。実施にあたっては、調査会社と内容を検討し、調査は無記名であり回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことによる不利益は生じないことなどを提示した上で実施した。保護者同席のもとで回答してもらった。

【結 果】

（１）交代性意識の構造

交代性意識の尺度の構造を確認するために、8項目に対して因子分析を行った。因子分析は主因子法を用いて実施され、バリマックス回転を行った。因子の抽出基準は、カイザーの基準に基づき固有値が1以上であることとして、2因子構造が妥当であると判断した。バリマックス回転後の因子パターンをTable2に示した。Table2に示すように、因子1には6つの項目が高い負荷量を持ち、因子2には2つの項目が高い負荷量を持つことが確認された。

因子1は、主に遊び場面での遊具の使用や役割の交代に関する項目で構成されているため「遊具・役割交代性」因子と命名した。因子2は、主に話し合いにおける意見を言うこ

Table 2
交代性意識の尺度の因子分析結果

交代性意識尺度項目	因子負荷量	
	F1	F2
F1. 遊具・役割交代性		
1. トランプで最初にカードを配る役割は、交代でやった方がいいと思う	.34	.24
2. ごみすて当番は、やりたくない人が多いので、交代するルールを決めた方がいいと思う	.61	.15
3. 鬼ごっこで捕まったら、自分はすぐに鬼を交代すると思う	.45	.14
4. みんなが使いたい遊具が1つしかなかったら、交代で使おうと提案すると思う	.68	.27
5. ゲーム機やパソコンを使いたい人が多い時、交代するルールを決めた方がいいと思う	.78	.16
6. まだ使いたい遊具があっても、自分から友だちに交代することが多いと思う	.53	.31
F2. 発言交代性		
7. 友達が遊びを提案したら、次は自分が提案しようと思う	.19	.83
8. 話し合いで誰かが意見を言ったら、次は自分も意見を言うようにしようと思う	.26	.71

とに関する項目で構成されているため「発言交代性」因子と命名した。

因子分析の結果、交代性意識の尺度は2つの因子構造を持つことが確認された。遊具の使用や役割に関して平等に機会が与えられるという側面と、自分の意見を表明するために発言することに関して平等に機会が与えられるという側面は異なる側面であることが示された。従って、以下の分析はこの2側面を分けて検討していく。

（２）仲間との関係調整における交代性意識の発達

仲間との関係調整における交代性意識の年齢差と性差を検討した。そのために、対象者の遊具・役割交代性意識に関する6項目の平均点と発言交代性意識2項目の平均点をそれぞれ算出した（Fig.1, Fig.2参照）。このデータに基づき、3学年（小学4年生・小学6年生・中学2年生）×2性別（男児・女児）の2要因の分散分析をそれぞれ行った。

その結果、遊具・役割交代性意識に関して、有意差はみられなかった。また、発言交代性意識に関しては、主効果には有意差は見られなかったが、交互作用に有意な傾向がみられた（ $F(1,2)=2.41, p<.10$ ）。有意な傾向ではあるが、女児は小学4年生、6年生、中学2年生と学年が上がるにつれて、発言交代性意識の評定値が下がる傾向にあった。一方、男児は学年を通じて評定値が変化しない傾向にあった。小学4年生の時点で、女児の方が男児よりも評定値が高かったが、中学2年生ではやや男児の方が評定値が高い傾向に変化していた。

以上のことから、遊具・役割交代性意識も発言交代性意識に関しても、有意な学年差や性差が見られないことが示された。全体として仲間との関係調整における交代性意識にはこの時期の発達の变化はなく、小学4年生からある程度の交代性意識を持っており、中学生までその意識が変化しないことが明らかになった。

一方、有意な傾向ではあるが、発言交代性意識に関しては、女児で小学4年生から中学2

Fig. 1

遊具・役割交代性の意識の年齢差・性差

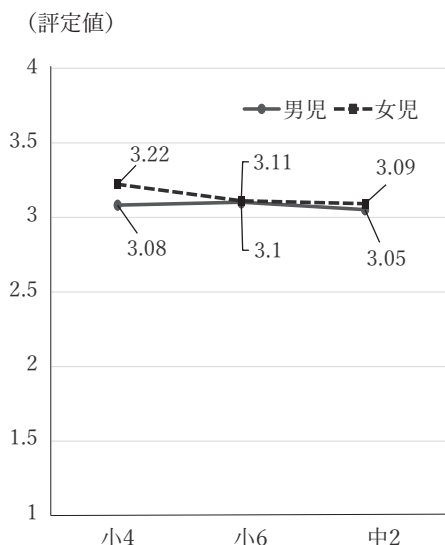
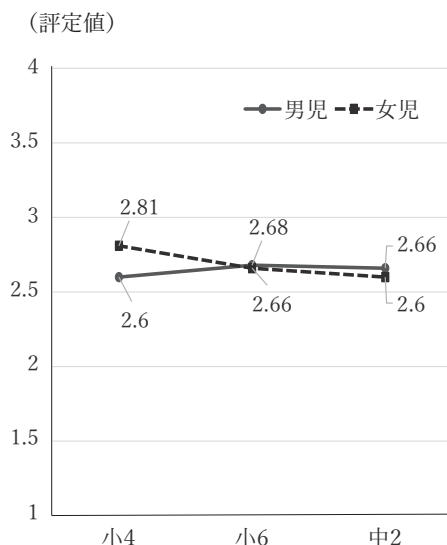


Fig. 2

発言交代性の意識の年齢差・性差



年生にかけて意識が低下することが示された。遊具や役割といった自分の行為の機会を平等に確保するための交代性意識は、評定平均値が3点台で全体的に高く小学4年生から中学生にかけて変化はしない。それに対して、自分の意見を表明するために発言することに関して平等に機会が与えられるという発言交代性意識は、遊具・役割交代性意識よりも意識が低く、女兒においては中学生以降意識が低下していく傾向が示された。

(3) 交代性意識と遊びの好み・互恵性との関連

まず、交代性意識と同様に、遊びの好みと互恵性の年齢差と性差を検討した。そのために、対象者の交代性意識、遊びの好み（ごっこ遊び、規則遊び、一人遊び）、互恵性意識の年齢別・性別の合計点の平均値をTable3に示した。このデータに基づき、3種類の遊びの好みと互恵性意識それぞれについて、3学年（小学4年生・小学6年生・中学2年生）×2性別（男児・女児）の2要因の分散分析を行った。

その結果、ごっこ遊びでは、年齢の主効果が有意だった（ $F(1,2)=9.02, p<.01$ ）。Tukey法による下位検定の結果、小学4年生と小学6年生の間、小学6年生と中学2年生の間に有意差があり、小学4年生と中学2年生が、小学6年生よりもごっこ遊びを好んでいることが示された。また、性別の主効果も有意だった（ $F(1,2)=78.00, p<.01$ ）。女兒の方が男児よりもごっこ遊びを好んでいることが示された。

規則遊びでは、年齢の主効果が有意だった（ $F(1,2)=20.04, p<.01$ ）。Tukey法による下位検定の結果、小学4年生と小学6年生と中学2年生の間にそれぞれ有意差があり、小学4年生、小学6年生、中学2年生の順で規則遊びを好んでいることが示された。また、性別の主効果も有意だった（ $F(1,2)=24.89, p<.01$ ）。男児の方が女児よりも規則遊びを好んでいることが示された。

一人遊びでは、年齢の主効果が有意だった（ $F(1,2)=15.92, p<.01$ ）。Tukey法による下位検定の結果、小学4年生と小学6年生、小学4年生と中学2年生の間に有意差があり、小学4年生が、小学6年生と中学2年生よりも一人遊びを好んでいることが示された。また、性別

Table 3
年齢・性別の交代性意識・遊びの好み・互恵性意識の平均値

平均値	遊具役割 交代性意識	発言 交代性意識	交代性 意識合計	ごっこ 遊び	規則 遊び	一人 遊び	互恵性 意識
小4男児	18.45	5.20	23.65	9.56	16.25	11.87	39.43
小4女児	19.31	5.62	24.96	12.43	14.34	14.55	41.76
小6男児	18.60	5.36	23.96	8.83	14.77	10.39	38.84
小6女児	18.63	5.31	23.94	10.48	13.10	12.32	39.87
中2男児	18.29	5.32	23.62	9.38	13.46	10.55	39.87
中2女児	18.53	5.19	23.72	12.15	12.83	13.08	40.97

の主効果も有意だった ($F(1,2)=72.36, p<.01$)。女兒の方が男児よりも一人遊びを好んでいることが示された。

互惠性意識では、性別の主効果が有意だった ($F(1,2)=8.09, p<.01$)。女兒の方が男児よりも互惠性意識が高いことが示された。年齢の主効果は有意ではなかった。

次に、遊具・役割交代性意識に対する年齢、性別、遊びの好み（ごっこ遊び、規則遊び、一人遊び）、互惠性意識の影響を検討するために重回帰分析を行った。重回帰分析の結果をTable4に示した。重回帰モデルの決定係数は $R^2=0.39$ であり、独立変数が従属変数の39%を説明していることが示された。調整 R^2 は0.38であった。回帰モデルは有意であり、 $F(6,656)=68.83, p<.001$ であった。互惠性の標準化回帰係数 (β) は0.57, $t(656)=17.53, p<.01$ であり、遊具・役割交代性意識に対して有意な正の影響を持つことが示された。また、規則遊びの標準化回帰係数 (β) は0.13, $t(656)=3.59, p<.01$ であり、遊具・役割交代性意識に対して有意な正の影響を持つことが示された。

以上の結果から、互惠性意識と規則遊びの好みは、遊具・役割交代性意識に対して有意な正の影響を持つことが示された。

同様に、発言交代性意識に対する年齢、性別、遊びの好み（ごっこ遊び、規則遊び、一人遊び）、互惠性の影響を検討するために重回帰分析を行った。重回帰分析の結果をTable5に示した。重回帰モデルの決定係数は $R^2 = 0.19$ であり、独立変数が従属変数の19%を説明していることが示された。調整 R^2 は0.18であった。回帰モデルは有意であり、 $F(6,656)=25.47, p<.001$ であった。互惠性の標準化回帰係数 (β) は0.42, $t(656)=11.29, p<.01$ であり、発言交代性意識に対して有意な正の影響を持つことが示された。また、ごっこ遊びの標準化回帰係数 (β) は0.09, $t(656)=1.74, p<.10$ であり、発言交代性意識に対して有意な傾向の正の影響を持つことが示された。

以上の結果から、互惠性意識は発言交代性意識に対して有意な正の影響を持ち、ごっこ遊びの好みは、発言交代性意識に対して有意な傾向の正の影響を持つことが示された。

Table 4
遊具・役割交代性意識に対する重回帰分析の結果 (N=663)

説明変数	非標準化係数	標準化係数	95%CI				
	β	β	t値	有意確率	下限	上限	VIF
年齢	-.013	-.019	-.593	.554	-.055	.029	1.091
性別	.028	.025	.728	.467	-.047	.102	1.276
互惠性	.046	.570	17.543	.001	.041	.051	1.127
ごっこあそび	-.010	-.069	-1.541	.124	-.023	.003	2.135
規則遊び	.019	.128	3.595	.001	.008	.029	1.347
一人遊び	.007	.052	1.147	.252	-.005	.020	2.234
R^2	.381***						

Table 5

発言交代性意識に対する重回帰分析の結果 (N=663)

説明変数	非標準化係数	標準化係数	95%CI				
	β	β	t値	有意確率	下限	上限	VIF
年齢	.032	-.039	-1.052	.293	-.097	.029	1.091
性別	.057	-.024	-.616	.538	-.147	.077	1.276
互惠性	.004	.421	11.288	.001	.037	.052	1.127
ごっこあそび	-.010	-.090	1.742	.082	-.002	.036	2.135
規則遊び	.008	.031	.749	.454	-.009	.021	1.347
一人遊び	.010	-.057	-1.076	.282	-.030	.009	2.234
R ²	.182***						

【考 察】

本研究の第一の目的は、小学4年生、小学6年生、中学生2年生を対象に、交代性意識の発達を検討することだった。まず、交代性意識の尺度の構造を確認した結果、「遊具・役割交代性」因子と「発言交代性」因子の2因子が見いだされた。遊具の使用や役割に関して平等に機会が与えられるという側面と、自分の意見を表明するために発言することに関して平等に機会が与えられるという側面は異なる側面であることが示された。しかし、発言交代性意識は2項目しかない。従って、今後発言交代性意識の項目を増やして、2因子構造の尺度を明確に作成する必要があると考えられる。

次に、交代性意識の年齢差と性差を分析した結果、遊具・役割交代性意識については有意な年齢差も性差も見られなかった。仲間との関係調整における遊具や役割についての交代性意識には、この時期の発達の変化はなく、小学4年生からある程度の交代性意識を持っており、中学生までその意識が変化しないことが明らかになった。ただし、有意な傾向ではあるが、発言交代性意識に関しては、女兒で小学4年生から中学2年生にかけて意識が低下することが示された。

このことから、交代性意識は遊具・役割交代性意識と発言交代性意識は異なる発達過程を持つことが示唆される。上述したように、交代性意識項目を増やして、2側面を明確にして、その発達過程の違いを今後さらに検討する必要がある。遊具・役割交代性ルールの使用や産出に関しては、4歳から9歳までに交代性ルールの基準が明確になり、言語的に明確な交代性ルールを産出して共有できるようになるという発達が明らかになっている(阿南,1989;藤田,2007,2015,2016,2018)。このように、自己と他者を考慮に入れて、交代性ルールによって仲間との関係調整を行うことは小学3年生までにある程度完成し、交代性を重要視する意識は、この後大きな変化がないことが示唆される。

また、これらの従来の研究(藤田,2007,2015)では、交代性ルールの使用や産出には性差が

みられ、女兒の方が早く発達することが示されていた。しかし、本研究では、性差もみられなかった。遊具・役割交代性意識は、小学4年生以降、男児の発達が進んで性差がなくなることも本研究から示唆される。

一方で、発言交代性意識については、幼児期からの研究はないため比較はできないが、女兒の方で中学生にかけて意識が低下する傾向が示された。平等に遊具を使用したり役割を遂行したりすることに比べると、発言に関しては必ずしも平等が良いとは限らない。小学校高学年頃から、自分の意見を言うことに躊躇し、意見をわざわざ言う必要もないと女兒は考え始めるのではないかと考えられる。協同学習が活発に行われるためには、平等に意見を出し合う話し合いが重要になってくるが、交代性意識の停滞が協同学習の効果の抑制になる可能性もある。今後は、発言交代性意識を協同学習場面とも関連づけて検討していく必要があるだろう。

本研究の第二の目的は、交代性意識に関わる要因として、子ども時代の遊びの好みと互惠性意識との関連を検討することだった。分析の結果、遊具・役割交代性意識に対しては、規則遊びの好みと有意な正の影響を持つことが示され、発言交代性意識に対しては、ごっこ遊びの好みが有意な傾向の正の影響を持つことが示された。つまり、交代性意識の2側面の発達には異なる影響要因が関連していることが示された。

規則遊びを好む小中学生は、明確なルールに基づき、交代性ルールを足場かけとして仲間との平等な関係調整を行う経験が多くなる。ゲーム遊びの中では、5歳児であっても不公平に関する構造的な客観的理由を考えることができる点が指摘されている(Zhang,M.Y. et.al,2023)。したがって、規則遊びを好む小中学生は、その後も客観的に仲間との関係調整を行うことができる遊具・役割交代性意識が高くなると考えられる。遊びの経験が進行形に近い小中学生を対象にした本研究の結果から、仲間との関係調整の発達において、ルールが明確な規則遊び体験が重要であることが示唆される。

一方、発言交代性意識には、ごっこ遊びの好みに関連している傾向があった。従来藤田(2022)で示されていたごっこ遊びの好みと交代性意識との関連は、大学生を対象としたものであり、交代性意識の質問項目が発言交代性意識と共通するものが多かった。したがって、発言交代性意識とごっこ遊びの好みの関連は、従来の研究を支持するものであると考えられる。ルールが明確な規則遊びよりもごっこ遊びの方が発言交代性意識と関連しているのは、想像的で自由な仲間との相互交渉が影響を及ぼしていることが示唆される。しかし、どちらの研究結果も有意な傾向であることから、ごっこ遊びと交代性意識との関連は、ごっこ遊びの体験内容を踏まえたうえで、再検討していく必要がある。

また、遊具・役割交代性意識と発言交代性意識の両方に、互惠性意識が有意な正の影響を持つことが示された。このようなお返ししなければ申し訳ないという感情を伴う互惠性意識は、平等性という客観的認識を伴う交代性意識と類似しており、強い関連が見られるという仮説が支持された。谷口・田中(2003)では、高校生の長期的な友人関係において、サポートの互惠性が精神的健康と関連していることが示されている。本研究では、互惠性意識と交代性意識に関連が明確に見られたため、交代性意識も精神的健康と関連する可能性が示唆される。交代性意識が仲間との関係調整に重要であるとともに精神的健康とも関連していることを今後明確に検討していく必要があるだろう。

【引用文献】

- 阿南 文(1989). 遊び場面における子供のルール共有過程 教育心理学研究,37,218-224.
- Asendorpf,J.B.,Denissen,J.J., & Aken,M.A.G.(2008).Inhibited and aggressive preschool children at 23 years of age: Personality and social transitions into adulthood. *Developmental Psychology*,44,997-1011.
- 藤田 文(2007). 魚釣りゲーム場面における幼児の交互交代行動－交互交代の基準と主導者に着目して－ 発達心理学研究,18,227-235.
- 藤田 文(2015). 遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達：交代性ルールの産出とその主導者を中心に 風間書房
- 藤田 文(2016). 魚釣りゲーム場面における幼児の三者関係の交代行動－月齢による相互交渉の違い－ 大分県立芸術文化短期大学研究紀要,53,59-67.
- 藤田 文(2018). 幼児の協同行動における交代性ルール 大分県立芸術文化短期大学研究紀要,56,177-186.
- 藤田 文(2019). 短期大学の多人数授業への協同授業の適用(2)－交代性意識とディスカッションスキルを中心に－ 日本協同教育学会第16回大会発表論文集,86-87.
- 藤田 文(2022). 大学生の交代性意識と子ども時代の夢と遊びの関連 大分県立芸術文化短期大学研究紀要,60,107-116.
- Gruzewski,K.(2020). Therapy games for teens. Emeryvill, California: Rockridge Press.
- Hawkins,R., & Nabors,L.(2018). Promoting prosocial behaviors in children through games and play. New York: Nova Science Publishers.
- 岩田 美保(2019). 幼児期の親密な仲間間の「おもしろい」・「楽しい」の感情言及機能：その関係構築に果たす役割に着目した発達の検討 発達心理学研究,30,44-56.
- 芝崎 美和・芝崎 良典・徳田 英子(2016). 幼児期の感情表出を促す文化的要因－短期縦断的観察研究による検討－ 新見公立大学紀要,37,15-21.
- 瀧川 裕貴.(2009). 互惠性に基づく平等の規範理論 理論と方法,24,1,21-39.
- 谷口 弘一・田中 宏二.(2003). 児童・生徒のサポートの互惠性と精神的健康との関連に関する縦断的研究 心理学研究,74,1,51-56.
- 谷口 弘一・田中 宏二.(2005). サポートの互惠性と精神的健康との関連に対する個人内発達の影響：利得不足志向性及び利得過剰志向性の発達の变化 対人社会心理学研究,5,7-13.
- Zang,M.Y., Sullivan,J.N., Markman,E.M.,& Roberts,S.O.(2023). Children's structural thinking about social inequities. *Child Development Perspectives*,18,19-25.

【付 記】

本研究の一部は日本発達心理学会第35回大会にて発表された。また、本研究は令和2・3・4年度科学研究費基盤研究(C) 課題番号20K03352(研究代表者:藤田文)の補助を受けた。

